

# 第3部 災害医療の在り方 ⑧ — 再構築への司令塔①

# 未来へ

## 被災地からの提言

24

同市高田町の第一中に救護所を構えた藤田センター長ら日赤医療班が、同じく主に西側を担当した。

全体の指揮は石木院長が執り、日赤がサポートした。藤田センター長は「石木先生は確かに疲れ、傷ついていたが、あの状況下で市民が信頼できるのは、長年市民とともに地域医療をつくり上げてきた石木先生だけだ。われわれ外部の者がどんなに頑張っても、絶対に取って代わることはできない」と考えた。

さらに、いわて災害医療支援ネットワーク(本部長・高橋智医師)が全国から押し寄せた支援チームの調整などを行い、現場をサポートした。

佐々木保健師も石木院長と協力しながら、公衆衛生分野のコーディネートを担当した。

大学が理解を示し、1年間は毎週1度、今も月に1度は同市を訪れて活動している。

避難所の感染症予防などの緊急対策から始め、今は「市保健医療センターに県立高田病院臨時診療所を立ち上げ、国保広田診療所の備、中長期的な地域包括ケアの体制づくりを力して、主に市の東側近江三喜男院長らと協力して、市民一人一人の救護と巡回診療を再開。

震災前、佐々木保健

師や石木院長、そして

佐々木保健師は「私

は、志半ばで逝

った仲間の思いを絶対

に忘れない。私の人生

の全てを懸けて、陸前

高田を日本一のまちに

する」と決意する。

(第3部終わり)

陸前高田市役所2階時代は県立高田病院の

石木幹人院長(65)らと

協力し、寝たきりや認

知症の予防を目指す

の保健師は、9人のうち

6人が死亡した。

震災1年前の201

0年3月まで3年間、

県からの派遣で同市に

勤務していた秋田市の

日赤秋田看護大助教の

佐々木亮平保健師(37)

は、看護師の妻宏美さ

ら(33)に「陸前高田を

助けに行きたい」と告

げた。

長期支援のためには

大学を辞めなければな

らない。幼い3人の子

どもたちを思うと迷い

た。

同大に隣接する秋田

赤十字病院の看護医療

班を率いる藤田康雄同

病院長(56)に頼み込んで医

療班に同行し、11年3

月16日に陸前高田市を

訪れた。

市災害対策本部が置

かれた市給食センター

に入ると、菅野道弘健

康推進課長が「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

怒った。

院長は「遅いっ

」と

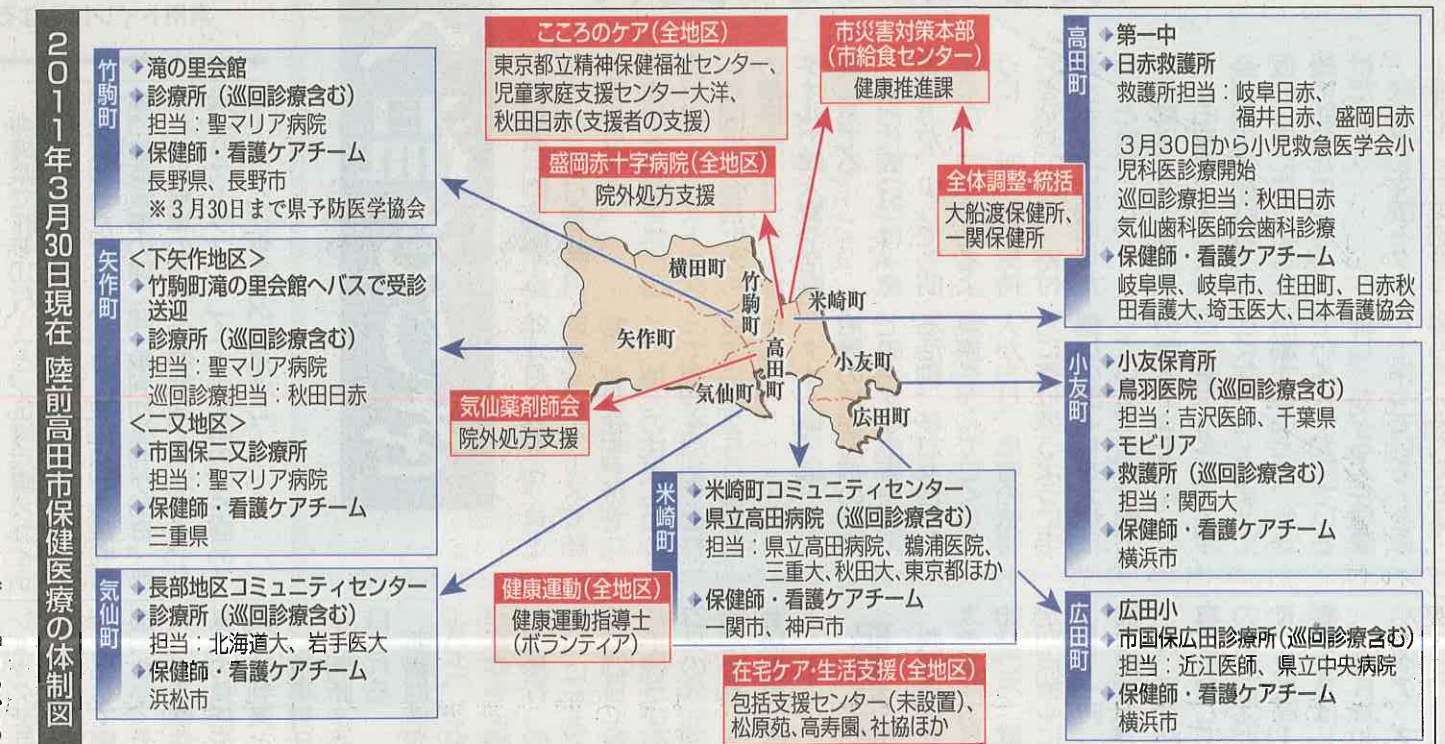
怒った。

院長は「遅いっ

# 全てを懸け日本一に



「亡くなった仲間の思いを決して忘れない」と誓った佐々木亮平保健師。秋田市・日赤秋田看護大



2011年3月30日現在 陸前高田市保健医療の体制図

同時にも、あと1年市役所で働いていたら、間違いなく私も死んでいた」と思っただが生き延びた。「私は、志半ばで逝った仲間の思いを絶対に忘れない。私の人生の全てを懸けて、陸前高田を日本一のまちにする」と決意する。(第3部終わり)

いわて災害医療支援ネットワーク 災害派遣医療チーム(DMAT)撤退後、切れ目のない災害医療の提供を目指し、岩手医大と県、県医師会などが設立。全国からの医療支援チーム受け入れに伴う現場の負担を軽減するため、原則として長期間活動できる団体に限定して受け入れ、計画的に各地へ派遣するなどの後方支援を行った。被災地で活動した多くの医療者が、昨年6月に亡くなった高橋智本部長の献身的な努力に深く感謝している。